新聞定価 朝夕刊月ぎめ 本体価格 3,738円(税込み 4,037円)、1部売り(税込み)朝刊 150円、夕刊 50円 第3種郵便物認可

記録と記憶

消された戦争 3

見過ごされたトラウマ

元日本兵「殺してしまった」続く幻聴・幻覚

戦場での体験や軍隊生活を原因として、心に傷を負った多くの日本兵がいた。しかし、そうした人たちは、この社会に存在しないかのように扱われてきた。戦中も戦後も。残された記録や証言をもとに、戦争によるトラウマをいま考える意味とは。

山形市で診療所を営む精神科医の五十嵐善雄さん(69)は、ある患者との出会いが忘れられない。

開業したばかりの2008年。83歳の男性が慢性の統合失調症とある紹介状を手に訪ねてきた。月に1回、10分ほどの診察が始まった。男性は一切笑顔を見せない。

「叫び声が聞こえる」という話には、慢性患者とは思えない「生々しい響き」があった。

4年が過ぎたある日。男性は付添人に席を外すように頼んだ。そして、とつとつと話し始めた。

「上官の命令だった」

「殺してしまった」

「子どもの泣き叫ぶ声が耳に残っている」

およそ70年後の「告白」。顔は青ざめていた。

学徒出陣で、旧満州へ。戦後4年間はシベリアに抑留。帰国後、幻聴に襲われ、自傷行為を繰り返した。40代後半から30年間、精神科に入院。施設に移った後に、五十嵐さんの診療所を訪ねた。

「告白」後に週1回、30分の面談を重ねると、幻聴や幻覚が、中国で手にかけた人たちの声や表情のフラッシュバックだったとわかった。男性はしばらくして肺炎で亡くなった。

□ □

統合失調症ではなく、戦争によるPTSD(心的外傷後ストレス障害)ではなかったか――。五十嵐さんは、過去に出会った患者や家族を、戦争の傷痕とともに思い返すようになった。

毎晩うなされていた元関東軍の憲兵。旧満州からの引き揚げ時に妹がロシア兵にレイプされ、殺されたという女性……。

精神科医としての経験を語る五十嵐善雄さん=山形市

軍隊で心病むのは恥「一名も発生致しませぬ」

ただでさえ社会の偏見や差別にさらされる精神医療の世界。PTSDを知ったのも、戦後50年経った阪神大震災以降のことだ。

「戦争体験を真剣に受け止めず、統合失調症とひとくくりにし、幻聴や幻覚を抑える薬の処方ばかり。薬を飲み続ければ、思考も鈍り、口も重くなる。そうやって、気づけなかった戦争によるトラウマがどれほどあっただろうか」

今年6月、札幌。五十嵐さんは、海外派遣された自衛官らの医療支援を考えるシンポジウムで発言した。イラクやインド洋に派遣され、帰国後に自殺した自衛官は61人。さらなる任務拡大がもたらす結果を危惧する。「日本兵のトラウマに触れた経験を生かしたい」

□ □

戦時中、精神疾患を発病した日本兵は主に、千葉県の国府台(こうのだい)陸軍病院に送られた。1937年から45年まで1万人余りが入院した。

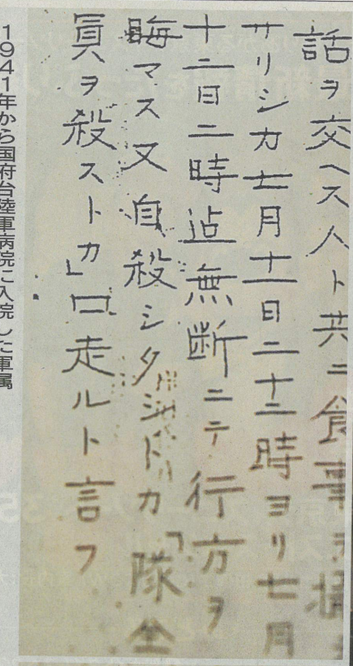
約8千人分の「病床日誌」(カルテ)は、終戦時の焼却命令に抗し、病院関係者がひそかに残していた。戦友の死や戦闘への恐怖、罪悪感によるストレス症状が読み取れる。日誌を研究する埼玉大の細渕富夫教授(61)は「悪夢に苦しめられるなど、PTSDとみられる患者は少なくない」とみる。

1月に「戦争とトラウマ」を出版した歴史研究者の中村江里さん(35)によると、当時の医師たちは精神疾患は個人の弱さに原因があると考え、専門病院は効率的に前線に戻すために設けられた。「『天皇の軍隊』にとって心を病む兵士は、恥とされた」という。

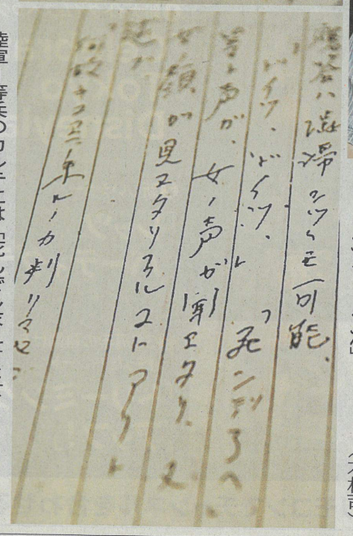
当時の陸軍省医事課長は「戦争神経症なる精神病は幸いにして一名も発生致しませぬことは、皇国民(みん)の特質士気の旺盛なることを如実に示すもの」と講演。一方で、従軍した医者が患者の訴えを記していた。「内地へ帰されたら新聞にすぐ出されます。国賊を出したといふので両親も兄弟も土地に居られません」

中村さんは言う。「見過ごされてきた背景には、私たちの社会の偏見や差別もある。過去の戦争の傷を知らない私たちに、現代の戦争がもたらすトラウマと向き合えるでしょうか」

(木村司)



1941年から国府台陸軍病院に入院した軍属の「病床日誌」には「自殺シタシトカ『隊全員ヲ殺ストカ』ロ走ルト言フ」と記されている



陸軍1等兵のカルテには「死んでしまえ」と女の声が聞こえるなどと記されている=いずれも「精神障害兵士『病床日誌』編集復刻版」から